HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	インタビュー体験が学生に及ぼす教育効果 ： 老人看護学授業方法の検討
Author(s)	坂倉, 恵美子
Citation	北海道大学医療技術短期大学部紀要, 11, 79-84
Issue Date	1998-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37635
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_79-84.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

原　　著

インタビュー体験が学生に及ぼす教育効果
―― 老人看護学授業方法の検討 ――

坂倉恵美子

Educational Effects of Interviewing Conducted by Students
―― Study on Nursing Teaching Methods for the Elderly ――

Emiko Sakakura

Abstract

The purpose of this study is to have students understand the elderly by interviewing their grandparents on their life histories, and having them think about the meaning of the experiences and lives of elderly individuals.

The following results were obtained by an analysis of the students' reports on the interviews they conducted;

1) Significant events characterizing the life histories of grandparents which they told to the students, were those that had been impressive on the elderly through the course of their development from childhood.
2) By understanding the life histories of their grandparents, the students developed a feeling of sympathy and respect for them.
3) Although students used to judge the elderly only by appearance, they seemed to consciously change their attitude and come to accept elderly people as individual human beings.

This analysis suggests a necessity for real experience for young people to come into direct contact with the elderly in the elderly nursing education of the basic nursing education program.

Key Words: Interview, Elderly nursing, Education, Student, Teaching methods

抄　　録

本研究では，学生の祖父母のライフヒストリーを聞き取り，高齢者個人の体験と人生の意味を考えることを通して，高齢者の理解につなげることを意図している。

学生がインタビュー体験し，提出したレポート内容を分析整理した。

北海道大学医療短期大学部看護学科
College of Medical Technology, Hokkaido University

以下の結果を得た。
1）祖父母が学生に語ったライフヒストリーの特徴を示す事柄は，高齢者の発達課題上の印象的なできごとであった。
2）学生は祖父母のライフヒストリーを知ることにより，父母に対して共感，尊敬の気持ちを懐いている。
3）老人を外見で判断していたが，1人の人間としてみようとする意識が見られる。
看護基礎教育における老人看護教育では，高齢者と実際にかかわりあう実体験の必要性が示唆された。

キーワード：インタビュー，老人看護学，教育，学生，授業方法

1．はじめに

高齢社会は，着実に迫り日本の老齢人口は世界に類を見ない速さで進んでいる。看護基礎教育のカリキュラムが本年改正され，老人看護の質・量は拡大し，ケアーの担い手育成の責任は大きい。我が国では能力主義，効率主義を偏重する結果，加齢のために能力低下を来たしている老人を過小評価する傾向がある。また社会の変化に伴い，隣人関係が希薄，核家族化等の要因により，老人との生活および接触体験の少ない学生は，増えており，身近に老人をイメージできない学生は増えている。

老人看護学では，老年期にある対象を身体的・心理・社会的側面から理解し，QOL を踏まえた援助ができることをねらいとしている。老年期は，衰退・喪失期としてのみでなく，生きてきた証しの完熟期としてまた，人生を振り返り人生の総決算とし自我を統合する時期[1]と捉えられる。

看護婦として対象の様々な生活場面における看護を展開できるための知識を身につけるためには基礎教育の段階から高齢者の生活理解の具体的な方策を考え，教育しなければならない。

老人看護教育の学習形態としては，講義・演習・実習があり，知識・技術・態度を育成する教育方法の検討が必要である。

講義では，「対象の理解」に老人看護学全体のうち多くの時間を要し，身体的・心理・社会的側面とその過程を教授[2]する。しかし，一人の独立した人間の理解が観念的・画一的な理解にとどまっている。また，高齢者と接触機会が少ない学生が増えている現在，老いに関する情報は，マスメデイアに影響される。

高齢者のイメージに関する調査結果[3]から，スウエーデンと我が国を比較すると，我が国の若者は老人との接触機会が少ないということが明らかになった。かっての日本社会では，拡大家族が一般的であったから，子供達は祖父母を身近に育ってきた。生活の中に祖父母は存在し，祖父母を手がかりに高齢者を理解していった。相手との接触が少ないことは，実際の姿を知ることがなく，ステレオタイプな像が形成され偏見[4][5]が生じ易いと考える。

そこで，老人看護教育において学生の身近な存在である祖父母を理解することにより，老人看護の対象である高齢者の理解につながると考えた。学生の祖父母にライフヒストリーを聞き取り，「祖父母の体験と祖父母の人生の歴史を知る」ことを通して高齢者の理解に繋げることを意図して，本研究に取り組んだ。

2．目　　的

① 学生がインタビューした祖父母のライフヒストリーの特徴を明らかにする。
② 祖父母へのインタビュー体験が学生に及ぼしたことは何かを明らかにする。

3．研究方法

① 対象：看護学校（3年課程）2学年 36 名
② 時期：老人看護概論終了後 1996 年 8 月
③ 分析対象：夏期休暇中に学生が取り組んだ

「身近な祖父母のライフヒストリーをインタビューし，その結果の感想」のレポート内容

④　分析方法：

a．「インタビューの内容」から老人のライフヒストリーの特徴を表わす語句を抽出，清野[6]の生活構造分類を参考にネーミングした。

b．「感想」からはインタビュー体験が学生に及ぼしたと思われるセンテンスをKJ法にて整理し，抽出した。

4．結　　果

学生がインタビューした老人は，祖父8名，祖母18名，その他3名であり，老人との同居者13名（36%），非同居者20名（55%）で，その他3名は非血縁者であった。年齢構成は，70代が多く，最高92才，最低67才であり，平均年齢は，77.3才であった。その人たちの成育過程は，表1に示すような時代背景であった。

表1　時代背景の主な出来事

年　　代	出　来　事
1904（明治37）	日露戦争
1907（明治41）	小学校令改正
1923（大正11）	関東大震災
1945（昭和20）	終　　戦
1947（昭和22）	ベビーブーム
1960（昭和34）	高度経済成長
1963（昭和38）	老人福祉法の制定
1964（昭和39）	東京オリンピック開催
1968（昭和43）	GNP世界第2位

1）学生がインタビューした老人のライフヒストリーの特徴について

祖父母が，孫である学生に語った内容は，人生における出来事とその時代の印象深い事柄が語られていた。結果の総数は，119個であり，一人平均3.3個であった。清野分類に基づいて整理したところ，次の6群になった。それらは，①「戦争」　②「食糧事情」　③「生活基盤」　④「生活信条」　⑤「歳時記」　⑥「先祖の供養」であった。

ライフヒストリーに語られた特徴的な内容表2について詳細を述べると次のようになる。

①　「戦争」に関連した内容は，35個（29%）であり，戦争中と戦争直後の出来事が現代の老人にとっては，印象深い体験である。

②　「食糧事情」は，28個（28%）であり，現代の老人が，青・壮年の時代に平均5人の子どもがいた時代を反映し，食糧事情が苦しかったことが語られている。

③　「生活基盤」と，④「生活信条」に関する語句は20個と14個であり，生誕後幼少期の時代の状況を懐古している内容が見られる。

⑤　「歳時記」14個（11%）は，その他の事柄を語りながら，祖父母の過ごし方が語られ，生活信条つまりは価値感を学生に伝えているものであった。

⑥　「先祖の供養」に関する8個（6%）は，先祖に対する尊敬の念，信仰の態度を表したものであった。

表2　ライフヒストリーの特徴的な語句

カテゴリー	内　　容	語句数	比率（%）
①　戦　　争	引き上げ，召集の赤紙，タコ部屋労働，樺太，襲撃	35	29
②　食糧事情	配給米，年貢米，魚と交換，蓬餅，栄養不良	28	23
③　生活の基盤	馬追い，暗い田んぼ，裸足，冷害，石炭ストーブ	20	16
④　生活信条	もったいない，辛抱，人間臭さ，やりくり，騙すより騙される（正直）	14	11
⑤　歳時記	蕎麦畑，リンゴの袋かけ，お蚕，リヤカー，正月のセーター	14	11
⑥　先祖の供養	お盆，朝晩のお参り，一家の大黒柱，命日，ご先祖様のお陰	8	6
	合　　計	119	100

表3　祖父母が話した内容

蓬餅，電化製品，我慢，努力，配給米，やりくり，樺太，ロシア人，引き揚げ，製糸工場，貧乏，人力車，馬，花札，タコ部屋労働，近所付き合い，東京は遠い，子沢山，未亡人，一家の大黒柱，家の手伝い，田舎道，機械化，トラクター，年季，魚うり，正月，山菜，お手玉，ゴム跳び，食料事情，栄養不良，苦労，お盆，命日，ご先祖，手編みのセーター，粗末，もったいない，綻び，闇米，軍司令部，冷害，満州開拓青少年義勇軍，冷害，リンゴの袋かけ，リヤカー，人臭さ，宗教，裸足，魚油のランプ，着古し，ホタテの皿，田んぼ，女手ひとつ，国後島，針仕事，第二次世界大戦，土方，密告，死別，薪割り，馬追い，部落，火事，石炭ストーブ，招集の赤紙，爆弾，空襲，防空壕，戦争

2）インタビュー体験が，学生に及ぼしたこと

学生が祖父母にライフヒストリーのインタビューを通して考え，感じたことは，33件のセンテンスで表わされた。老人との同居，非同居別の結果に有意差は見られなかった。

その結果，表4の6つのカテゴリーに整理された。

1．「祖父母が生きた時代の状況と体験を聞いて驚いた」は，5名（15%）である。対話を通して肉親である祖父母に対して，8名(24%)の学生が，2．「老人としてみる前に一人の人間としてみること」が必要であると感じている。祖父母のライフヒストリーを時間をかけて聞き取り，祖父母と自分は生きた時代のちがいはあるが，3．「時代を超えて共感できる」が8名(24%）であった。また，4．「祖父母に尊敬の気持ち」，5．「愛情の再確認」が12名(36%)，祖父母の存在の大切さに気付き，尊敬・愛情の気持ちへと変化した内容を示していた。

また，この課題に取り組むまでは考えたことがなかった6．「自分の理想とする老人像が形づくられた」学生が5名（15%）であった。祖

表4　学生が考え感じた内容のセンテンス

	カテゴリー	具体的な内容	センテンス数	比率(%)
1	祖父母か生きた時代の状況と体験を聞いて驚いた	・妹と共に祖母の幼少の頃の話を詳しく聞き楽しかった ・世の中の状況，祖父母の若い頃の様子，生活の苦労を聞いて驚いた ・普段，過去の話はしない祖父の話に驚いた	5	15
2	老人として見る前に一人の人間として見ることを学んだ	・祖父に時計の読み方を教わったことを思い出した ・祖父母の人間像が見えてきた ・私（学生）の接し方でよくも悪くも見えるのではないかと考えた	8	24
3	時代を超えて共感できることを学んだ	・相手を知ることはその人が体験してきた時代と生き方を知ることである ・外見で人を判断していた，人間らしい感覚を育てたいと考えた ・老人も寂しさ，不安，孤独を抱いている人間であることがわかった	8	24
4	祖父母に対して尊敬の気持ちが沸いてきた	・生きた時代，環境があり，現在のその人が存在する ・たくましく年月を生き抜いてきた祖父母を尊敬した ・家族のために辛抱して生活してきたことを知り尊敬した	5	15
5	祖父母に対する愛情を再確認した	・社会，家族のために働いた人を大切にする気持ちが沸いた ・今も子ども，孫を心配している祖父母に感謝の気持ちが沸いた ・これから，接し方が変わると思う	7	21
6	自分の理想とする老人像が形作られた	・生き方を聞き，自分の理想の老人像が浮かんだ ・辛い体験を聞き，自分の生き方の参考になった ・望む老年期を過ごせるために力を貸したい	5	15
合計			33	100

父母は幼少時から身近な存在であったが，この機会に改めてライフヒストリーを聞き，その内容に圧倒されている。祖父母の生活出来事の中に語られた学生の親と孫である自分との関係を実感している様子がうかがわれる。そして，祖父母の暖かい人間像が見え，将来の自分の老人像を思い描いている。

5．考　　察

1．インタビューを通して伝えられるライフヒストリーは，話し手が自分自身の生活体験に意味を与えるため，話し手の文化的背景に基づいて語られるものである。祖父母は，人生における重要な出来事を孫である学生に語っている。その内容は，高齢者の発達課題上のイベントと体験を通して形成された生活信条であった。

祖父母の暦年齢は明治・大正・昭和を含む歴史上の出来事を体験してきた。祖父母の記憶は，50年を経過した現在も，鮮明であり，そのことに学生は，驚いている様子である。祖父母は，孫という聞き手を得て，活き活きと自分史を語っている。

看護教育において，ライフヒストリーを聞き取り授業方法に取り入れた研究はなく比較はできない。しかし，血縁の人間の生きざま，生活の歴史を聞き取ることの教育的効果を得ることができた。

2．老人のイメージの変化について

イメージとは，ある考え，態度，相対的な印象[7]である。対人イメージは多様であるが感情がその人に関するイメージを基本的に左右する特徴がある。しかし，イメージは新しい経験によって絶えず修正を受け新しいイメージは作られるものである。

核家族の進行により学生は普段の生活のなかで老人に接する機会が少ない。そのため老いを実感することができず，マイナスイメージをもち老人を一括りにとらえがちであった。

同居していない学生は，祖父母と非日常的な関係つまり距離を置いた関係にあり，同居の学生は，一線を画している，老人として意識したことがないと記述しているが，課題への取り組みをすることにより新たなイメージ形成の機会になったと考える。

我が国の高齢者教育は，大きく三つに分類できる。第一は，高齢者のための教育（対象が高齢者）第二は，高齢者についての教育（高齢者を教材として若年者に高齢者理解を試みる方法）と第三は，高齢者による教育（高齢者が若年者との交流において教育的役割を果たす方法)[8]がある。本研究は後者の二類型に属する試みである。

身近な肉親を教材化することは，実像の高齢者を知る教育効果を得ることができた。学生達は，祖父母の見方の変化を通して，老人のイメージが肯定的に認識していることを示している。

6．結　　論

学生は，祖父母にライフヒストリーをインタビューする体験を通して

① 祖父母が学生に語ったライフヒストリーの特徴を示す事柄は，高齢者の発達課題のイベントからとらえられた生活信条であった。

② 祖父母のライフヒストリーを聞き，生き方を知ることにより，逆境時代に生きた祖父母に対して人生の先輩，尊敬の念を表す記述が見られた。

③ 老人に対して，頑固，鈍いなど外見で捉えていた老いの捉え方が肯定的認識を示す表現が見られた。

7．おわりに

看護学生に対する老人看護教育は，高齢者と実際に関わり合う実体験[9]の必要性が示唆された。

高齢者より学ぶこと，高齢者を教材として高齢者理解に活用する，世代間交流を教育に取り

入れるなどの試みを今後も検討したい。

引用・参考文献

1）E.H エリクソン，J.M. エリクソン：老年期，p.57-77，みすず書房，1990，東京．
2）見藤隆子：人を育てる看護教育．p.71-79，医学書院，1988，東京．
3）松下正子，森下利子，川出富貴子：看護学生の老人イメージ．看護展望 18(4)：90-95，1997．
4）大谷英子，松木光子：老人イメージと形成要因に関する調査研究．日本看護研究学会雑誌 18(4)：25-38，1995．
5）太湯好子：看護学生が抱く老人のイメージ．川崎医療短期大学紀要 11：7-12，1995．
6）清野きみ：生活構造の理論．p.112-119，放送大学教育振興会，1995，東京．
7）長嶋紀一：老化イメージについて，細亜大学教養部紀要 9：39-55，1974．
8）関口礼子：高齢社会への意識改革．p.37，頸草書房，1996，東京．